様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１８５

研究課題名（和文）歌舞伎を中心とした演劇雑誌の研究

研究課題名（英文）Research on the Kabuki magazines

研究代表者
児玉　竜一（Kodama, Ryuichi）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０２７７７８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　主要な歌舞伎雑誌の総目次の統合と総覧をめざすための、演劇雑誌全般に関する基礎的調査を行うという点では、所期の成果を収めることができた。創刊から終刊までの大半を押さえる雑誌タイトルは、研究着手時点の3倍に近い約110誌を数えるに至った。そのなかには、公的機関への収蔵がまったく知られていないタイトルも含んでいる。
　雑誌メディアを通して歌舞伎という文化が近代に占めていた位置の大きさを再確認するという点においても、より大きな発表機会のための基礎調査を行い得た。

研究成果の概要（英文）：I completed the fundamental research on the major kabuki magazines and journals centering around its contents, the duration of publications and editorials. The number of Kabuki publication titles covering most of the volumes from its first issue to the last or the latest, totaled over 110 which was three times more than what I started with. Fortunately, I discovered some new titles of kabuki magazines which had been unknown to any files of public facilities(i.e. Geikai 1911, Engeki, 1915).
This research of Kabuki publications over the years　reconfirmed me the significance of the existence of Kabuki culture in modern Japan.

研究分野：歌舞伎、日本演劇

キーワード：歌舞伎　雑誌　メディア　日本演劇

１．研究開始当初の背景

戦前まで庶民娯楽の中心に位置していた歌舞伎は、近代ジャーナリズム勃興以前の近世期から、毎年刊行される役者評判記を有していたこともあり、定期刊行物との縁はきわめて深い。明治 12 年には早くも専門誌「歌舞伎新報」をもつに至っており、以来、歌舞伎専門誌の刊行は、21 世紀の現在まで途切れていない。この間、代表的なものだけでも 50 誌は下らない。数多い演劇雑誌のなかでも、読者の範囲の広さ、執筆者の多彩さにおいても、歌舞伎雑誌が群を抜いている。

従来、個人的な同時代体験を元にした回想的評論が数多くものされ、研究前史を形作ってきたが、文学雑誌の研究成果等を踏まえて、演劇研究独自の研究が待たれることは明らかであると思われる。そのような状況に鑑みて、研究代表者は、演劇雑誌の総目次化と紹介を、いくつかの雑誌について進め、総目次を有する演劇雑誌タイトルをほぼ倍増させてきた。

２．研究の目的

歌舞伎雑誌の整理と研究を通して、演劇雑誌全般の研究のための基礎的研究をめざす。文学雑誌に比べて、演劇雑誌の研究は大きく立ち後れているが、近代の文化状況全般を考える上で、あるいは近世後期に関する知られざる証言を探索する上で、もっとも効率的に役立つのは雑誌であり、その内容の整理と紹介が演劇史研究に益するところは極めて大きい。

いくつかの歌舞伎雑誌の総目次作成を、ほぼ独力で進めてきた成果を踏まえて、歌舞伎雑誌については主要誌の総目次の統合と総覧をめざし、それに付随して演劇雑誌全般に関する基礎的調査を行う。

すでに知られている歌舞伎雑誌を、歴史的に概観すると、おのずから雑誌一般の歴史の動向を如実に反映している。

１）1879～　揺籃期＝代表誌「歌舞伎新報」
　　はじめての定期刊行物
２）1900～　研究・批評誌（Ａ５版）の確立
　＝代表誌「歌舞伎（第１次）」
　　評論・鑑賞誌（Ｂ５版）の確立
　＝代表誌「演藝画報」
３）1923～　写真誌（タブロイド版）の登場
　＝代表誌「劇」「芝居とキネマ」
４）1943～　戦中の雑誌統制
　＝代表誌「演劇界」「日本演劇」
５）1945～　戦後雑誌の簇生
　＝代表誌「幕間」「役者」「花道」「劇評」

これと別に、＜研究・批評誌／評論・鑑賞誌／写真誌／純研究誌／ファン雑誌／同人誌＞といったジャンル別に分けて考えることも可能である。本研究によって、さらに細かな雑誌タイトルを拾い上げることで、こうした見取図を、より精緻に、より広汎な視野のもとに捉えなおすことをめざしたい。

３．研究の方法

雑誌収蔵点数と閲覧の利便性から、公的機関では、早稲田大学演劇博物館、国立劇場伝統芸能情報館、松竹大谷図書館を重点的な調査対象とする。そのほかに、公的機関に収蔵されていない雑誌タイトルの発掘に努める。

創刊から終刊までの目次頁を押さえ、それを入力するとともに原本照合を行いつつ、統一的な総目次化のためのフォーマットをさぐる。合本された公的機関収蔵の雑誌は、表紙の隅に記された刊記など、実は閲覧できなくなっている情報も多いため、可能であれば、未製本の雑誌を閲覧することが望ましい。所有権および著作権の問題をクリアーできる場合には、複写によって電子化を行うことで、きたるべき雑誌の電子化事業のための基礎調査を兼ねることとしたい。

４．研究成果

主要な歌舞伎雑誌の総目次の統合と総覧をめざすための、演劇雑誌全般に関する基礎的調査を行うという点では、所期の成果を収めることができた。創刊から終刊までの大半を押さえる雑誌タイトルは、研究着手時点の 3 倍に近い約 110 誌を数えるに至った。そのなかには、公的機関への収蔵がまったく知られていないタイトルも含んでいる。

ただし、雑誌内容の紹介という形式は、雑誌論文や学会発表よりも、データベース公開もしくは単行本化等が望ましくもあり、本研究期間にはその形態を模索する段階に留まり、最終的な成果公開のために研究計画を継続することとしている。

しかし、本研究期間において、単行本【２】において、歌舞伎雑誌各タイトルの項目を執筆するとともに、創刊・終刊の鳥瞰図を提示しえたことで、従来の研究水準を大いに引き上げたものと考えている。この内容については、学会発表【４】において体系化しており、歌舞伎雑誌刊行の全体像をほぼ摑むに至っている。近世期からの、歌舞伎をめぐるメディアの総合的な全体像については、学会発表【１】において、国際的に発信する機会も得た。学会発表【７】においては、視聴覚メディアを扱っており、活字メディアに留まらぬ歌舞伎に関わるメディア全体像を模索しつつある。これらの視点は、本研究の後継と位置づける科研費研究において継続・大成してゆく予定である。

その他の学会発表は、歌舞伎雑誌の内容に基づくものが中心であり、いわば歌舞伎雑誌の効用を再認識する機会を多く設けた形ともいえる。雑誌の「雑」たる所以は、歌舞伎雑誌といえども、隣接諸ジャンルとの相関性の上に成立するところにあり、その内容に関連するところ、雑誌論文【１】における「新舞踊」、研究発表【８】における「近代美術」、

同【６】における「宝塚歌劇」など、従来の研究の視角では、歌舞伎との関連をあまり指摘されてこなかった分野との間に、いわば補助線を引く試みに着手し得ている。

こうした試みは、雑誌メディアを通して歌舞伎という文化が近代に占めていた位置の大きさを再確認するという点においても、より大きな発表機会のための基礎調査を行い得たものと位置づけている。

本研究に関連して４件の国際学会での研究発表の機会を得たことも、幸いであった。研究発表【２】【３】【５】は、主たる関心は標題の通りであるが、いずれにも一貫している課題は、歌舞伎という演劇ジャンルの階層化の問題である。大歌舞伎と称される、都市部の高級歌舞伎だけでなく、日本全国に散在する中級以下の諸座による演劇活動が、演劇研究の隘路となっている。これに鑑み、「女役者」「地方劇場」「初期映画」などの観点から、中級以下の諸座、いわゆる「小芝居」「旅芝居」を視野に収めた歌舞伎全体像を模索する試みなのであるが、それに際して最も重要な情報の源泉となるのが、数多くの演劇雑誌であることをも確認した。さらにいえば、地方の中小劇場の姿を確認できるのも、演劇雑誌の口絵であり、メディア（記録）としての演劇雑誌の潜在力は、さらに大きく喧伝できる豊かさを秘めているものと思われる。

所期計画において、もっとも立ち後れたのはデータ入力作業で、人材の確保と適切な進行体制を整えることが、後継研究での課題となろう。だが一方では、従来まったく知られていなかった雑誌タイトルの出現という、思いもよらなかった幸運な事態が続々と現れ、計画自体の重点をそちらに傾けざるを得なかった事情も伏在する。たとえば明治４４年に刊行された『藝界』なる雑誌は、これまで存在を知られていなかったが、創刊から、おそらく終刊と思われる 10 号までが一挙に出現した。特筆すべきことに、この雑誌の主幹を中途からつとめたのは、歌舞伎を含む演劇記者であった行友李風であり、新国劇の名作の作者として知られる李風の閲歴に、大きな新しい頁を記すことができた。同じく大正４年創刊の『演劇 The Drama』は、芸術座の機関誌という位置づけでありながら、これまでほとんどその所在が知られてこなかった。歌舞伎に隣接する新国劇関係の調査の途上で、偶然これを所蔵する個人の方を調査する機会に恵まれ、全冊の複写を入手することができた。また、これまでまったく手つかずであった写真誌の整理にも着手したが、その中途で、関西発の写真誌『演藝写真』（大正 11 年創刊）を知り、これも公的機関にない号をいくつか押さえることを得た。このタイトルの調査により、従来スクラップの形で保存されていた写真頁のいくつかが、これに由来することを突き止め、年代考証を可能にしたのみならず、絵葉書その他の写真素材との関係でも、興味深い流用の事例をいくつも見ることができた。こうした成果は、図書【１】と、それが基づく展覧会において発表することができたが、これらの新発見も、さらに研究期間終了後の機会を見て公表してゆく予定である。

本研究によって、歌舞伎雑誌刊行状況の全体像に迫ることは、近代のメディア環境の中における歌舞伎、ひいては演劇それ自身の位置を再確認することにつながる。本研究での成果を踏まえて、より広汎な歌舞伎メディア史の構築をめざす予定であり、本研究での成果はその基礎をなすものと位置づけている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

【１】 児玉竜一、「新舞踊と歌舞伎舞踊」、片岡康子編『日本の現代舞踊のパイオニア』（新国立劇場情報センター）、査読無、２０１４年、８－１７ｐ

【２】 石橋健一郎・神山彰・児玉竜一、座談会「大正の歌舞伎をめぐって」、『歌舞伎　研究と批評』、査読無、４８号、２０１２年、５－３２ｐ

〔学会発表〕（計　９件）

【１】 嶋崎聡子・埋忠美沙・Yasar Kerim・Jonathan Zwicker・児玉竜一、「Intermedial Kabuki」、Asociation for Asian Studies (AAS)、２０１５年３月２８日、シカゴ

【２】 児玉竜一、日本における劇場の分布と演劇の階層化、日仏演劇学会、２０１４年１０月１６日、ストラスブール大学

【３】 児玉竜一、「Kabuki Acting by Women and Its Legacy」、Asociation for Asian Studies (AAS)、２０１４年３月２９日、フィラデルフィア

【４】 児玉竜一、歌舞伎雑誌の系譜」、楽劇学会例会、２０１４年３月４日、早稲田大学文学部

【５】 児玉竜一、「日本演劇の伝統と日本映画」、リサーチセッション「Tradition in the Japanese Cinema」、２０１３年１０月１９日、ストラスブール大学

【６】 児玉竜一、「紀元二千六百年・宝塚少女歌劇団生徒の日記より」、日本演劇学会春季大会、２０１３年６月２２日、共立女子大学

【７】 児玉竜一、「フィクションとノン・フィクションの間――舞台と映像資料をめぐって」、藝能史研究會、２０１３年６月９日、同志社女子大学

【８】 児玉竜一、「歌舞伎と近代美術―その射程圏」歌舞伎学会秋季大会、２０１２年１２月８日、武蔵野美術大学

【９】 児玉竜一、「戯曲を刊行するのか、し

ないのか、それが問題だ」、日仏演劇学会、２０１２年１０月３０日、早稲田大学

〔図書〕（計　２件）

【１】 監修・解説＝児玉竜一／編集＝羽鳥隆英、早稲田大学演劇博物館、図録『寄らば斬るぞ――新国劇と剣劇の世界』展、２０１４年１１月、１２８ｐ

【２】 監修＝藤田洋・富澤慶秀／編集委員＝神山彰・丸茂祐佳・児玉竜一、柏書房、『最新歌舞伎大事典』、２０１２年7月、５７０ｐ

６．研究組織

（１）研究代表者

児玉　竜一（KODAMA, Ryuichi）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：10277783